

矢作川の流れの変遷と洪水について

【引用文献・六ッ美村誌、六ッ美風土記、私達のふるさと中之郷、ふるさと六ッ美西部
六ッ美の歴史を学ぶ会 村上信良氏 河原正史氏講演資料 他】

母なる川

太古より悠々と流れる矢作川は、幾筋もの流れを形成するとともに、多量の土砂を運びました。この土砂は自然の恵みとなり肥沃な土地を形成し、人々は自然堤防に集落を営むと共に低地に広大な耕地を築いてきました。矢作川は人々に恩恵をもたらす一方で、洪水による浸水や日照りによる水不足は生命を脅かす存在でもありました。幾度となく繰り返されてきた人間と川の闘いではありますが、それこそが六ッ美の歴史とも言えます。すなわち、人間と自然が織りなす土地の記憶こそが六ッ美の歴史なのです。



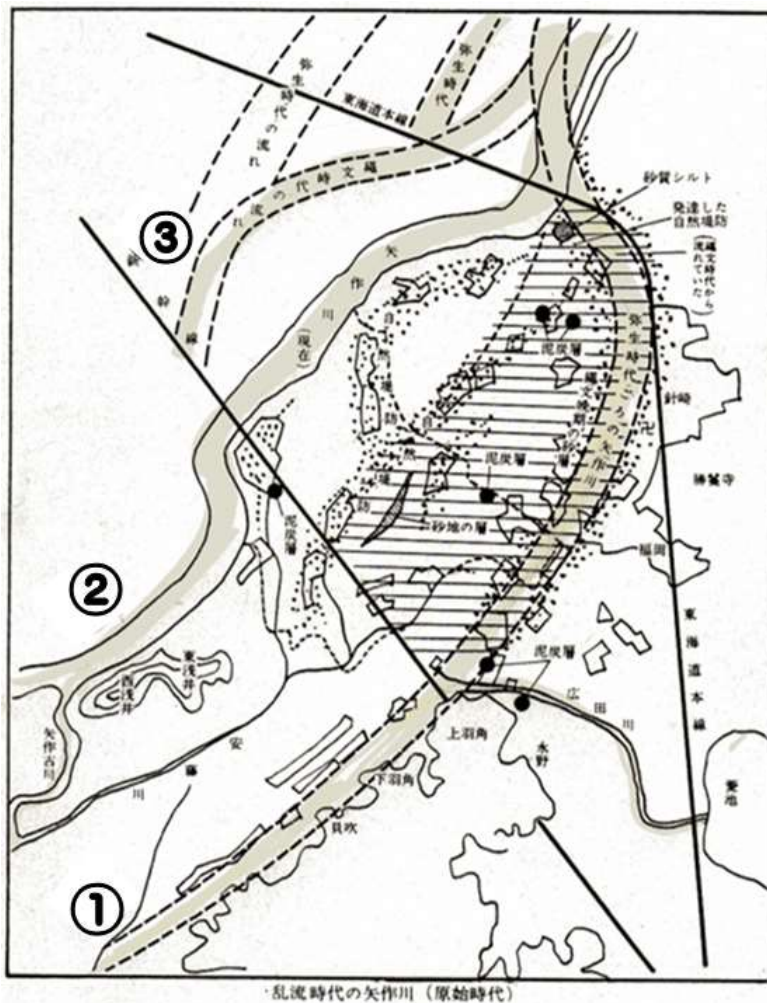
度重なる水害

悠紀の里 サポーター一会

矢作川の流れ変遷と地形

1. 六ッ美地区は、矢作川によって運ばれた大量の土砂の堆積域
 - ・・・ 自然堤防的な高台(沖積平野)は集落・畑
 - ・・・ 河原は蘆が群生、湿地地帯は水田として利用
2. 地質（ボーリング）調査の結果、堆積土砂の深さは30m
3. 川の流れは一定せず乱流的に流れていた
 - 中世までは、現在の本流的な矢作川は存在せず、安城地区との往来は比較的容易であった
4. 「六名堤」、「連続堤」等が築堤されて以来、本流は現在の矢作川となる
5. 1605年に「矢作新川」が開削され、ほぼ現在の河道となる

古代～弥生時代の矢作川の流れ



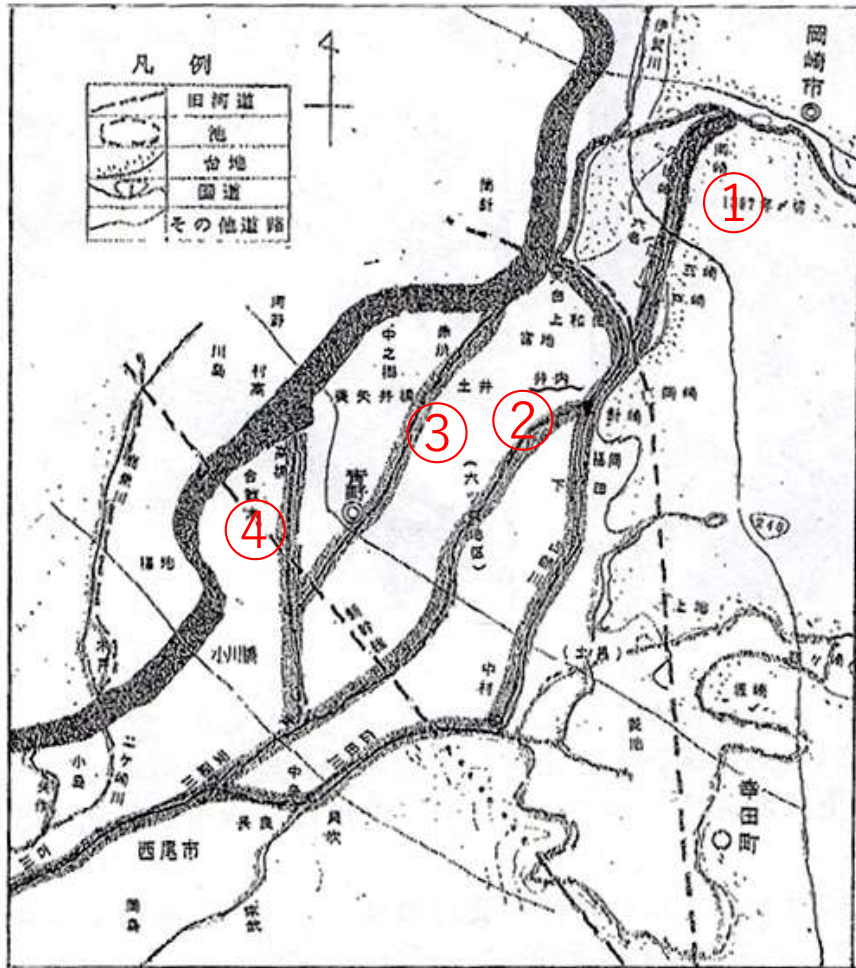
☆太古の昔は、矢作川の流れは定まらない暴れ川、荒れ川で流路は網の目の状態

☆左図は古代～弥生時代の矢作川の流れの説

- ① 弥生時代の矢作川の流れ
 - ② 現在の矢作川
 - ③ 安城地区の縄文、弥生時代の流れ
- ・ ①の川は、幸田の菱池の方へ流れた時代もあった
 - ・ 土砂堆積した自然堤防的な高台、堆積
平野に集落発生
 - ・ 湿地地帯で稲作、川原には蘆の群生

☆中世の時代は、地表上の形態（自然堤防）から

4本の流路と推定されている



六ツ美地区旧河道図

- ① 1本目 久後崎から六名を流れ、針崎辺りで現在の占部川と重なる流れ
- ② 2本目 井内辺りで①から分流し、坂左右と在家の間を流れ、安藤付近で今の安藤川排水路と重なる流れ
- ③ 3本目 赤渋辺りから土井、下青野を抜け、福桶辺りから安藤川支線と重なる流れ
- ④ 4本目 高橋付近から南流し、高橋用水路とほぼ同じ位置を流れ、安藤川排水路と重なり、矢作古川への流れ

★中世の頃、上記4本の流れがあっても、渇水期や水量の少ない時には渡河は容易にでき、六ツ美から安城方面へ

岡崎城近辺の矢作川の流路の固定

古地理調査、ふるさと六ツ美 より



図 3-10 六名堤と乙川旧流路
(『新編 岡崎市史』より作成)

- 1399年に「六名堤」の築堤新河道の掘削により乙川の流れも矢作川に注ぐようにした
- 1452～55年にかけて、西郷頼嗣が岡崎城の築城に合わせて築堤
- 1590～1600年にかけて、岡崎城主田中吉政によって連続堤が築かれた
⇒ これらの結果、矢作川中流部の流れは、ほぼ固定されたが、築堤技術が不十分でしばしば決壊した

矢作新川開削概念図

古地理調査

1600年頃の北浦とその周辺の想像図



- 旧矢作川本流は、ハッ面山に遮られることで急に流れを転じたため、この部分の流れが悪く、水害が絶えない地域であると共に矢作川の川底へ土砂が堆積し、洪水の原因となった
- 家康は、西尾藩主に新川の開削を命じた1603年起工、1605年に竣工現在の木戸から米津までの長さ1310m 幅20m、深さ3m程度の新しい堀割りを作り、矢作川の水路を西南の入り江に流すようにした
- ところがこの矢作新川の勾配が急であった為、川幅の拡大が進み、流量が増えると共に、大量の土砂を下流に運び、堆積した土砂は砂州状になり、地形を変えた

矢作川の洪水について

- 「六名堤」の築堤、岡崎城の築城に合わせての築堤、新川の開削等により矢作川の流路は一定となったが、江戸時代には洪水、堤防の決壊が頻繁に発生した
- 洪水が頻発したのは、
 - ① 川底に土砂が堆積し、水はけが悪くなると共に、川床が上がり「天井川」化がますます進行したこと
 - ② 堤防をかさ上げる工事も実施したが、堤防に使用した矢作川の土砂が水に対して弱かったこと、また当時は築堤技術も低く、強固な堤防が作れなかったこと
 - ③ 「川ざらえ」を幕府に要望したが、幕府役人には聞き入れてもらえ

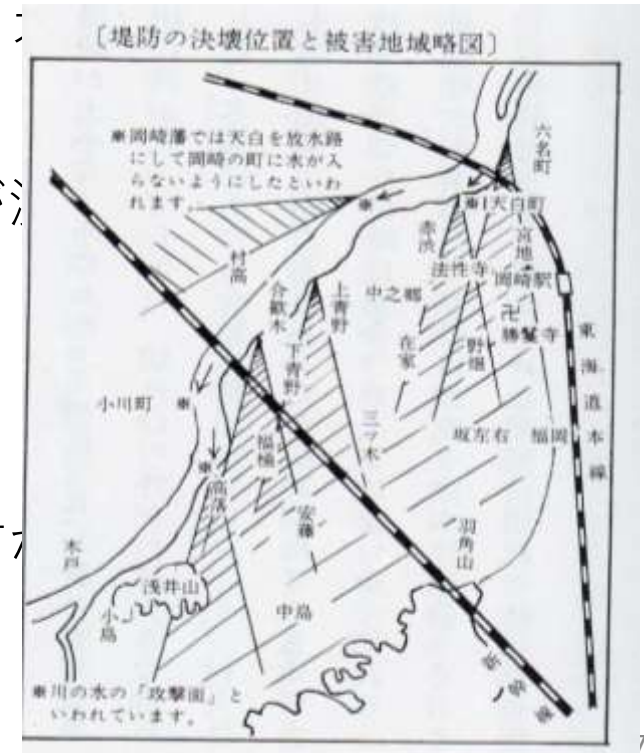
洪水の歴史-1

- 慶長の大洪水（1597年） ・ 天白堤決裂（1607年） ・ 光和の大洪水（1615年）
- 上青野で堤決裂（1646年）・・・来迎院西の堤防切れ、下青野から三ツ木に向かって

被害、流路になった区域はすべて砂地となり

- 矢作川大洪水、堤防決壊（1765年） ・ （1767年） ・
- 合歓木で堤防決壊（1787年）・・・正願寺の西で堤防が
付近一面の田は、田土が全部流され砂や小石の洲になった、切れの外側は大きな池に、合歓木新田は特に被害が大きい
- 上青野で堤防決壊（1825年）・・・本光寺西付近の堤防が
180m程度決壊、面積約1町の池ができ、蓮やヒシが生えた

- **蓮: 多年性水生植(地下茎はレンコン)**



洪水の歴史-2

- 天白で堤防決壊（1852年）・・・

天白地内の「大曲り」の辺で200m以上決裂、天白切れと同時に高落地内の堤防も切れ、矢作川の水は天白から入り高落に出た。在家・三ッ木等では床上

- 三ッ木で堤防決壊（1882年）・・・

久後埼で、80m程度決壊。下流である六ッ美地区、福岡地区、幸田地区、西尾地区

の多くは一面海の如くなり、人、田、家屋等に甚大な被害を与えた

- ☆ 戦後、「現存中で、破風、建豪雨の状態を記録」矢作川以外での堤防の決壊、道路の破損等がおこり、家屋の全壊、床上浸水、田畑への浸水等の被害が続き、排水路の整備、占部川、広田川等の流路の拡大、堤防の補強工事等が実施されている

- ☆ 昭和20年以降の大きな風水害・・・昭和28年 台風（台風の中心が通過）
S34年 伊勢湾台風（災害救助法適用） S44年 台風7号 S46年 台風23号

- ☆ 宅地化が進み、水田での保水等が減少し、一気に雨水等が流れることも主原因

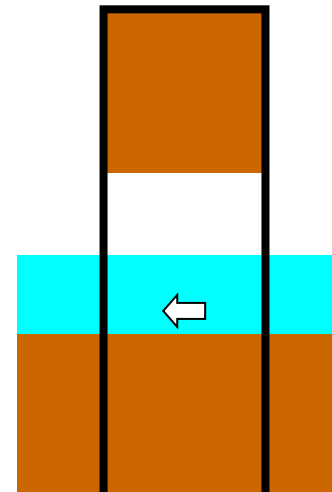
洪水の歴史-3

矢作古川分派堰施設

- ☆ 平成12年9月の東海豪雨など過去の洪水時に、矢作古川の計画分派流量を上回る流量が矢作古川へ分派し矢作古川沿川では浸水被害が多発していました。
- ☆ 矢作古川への分派量を200m³/sに制限する矢作古川分派施設の整備を進め、平成28年に同施設は完成しました。



矢作古川分派施設



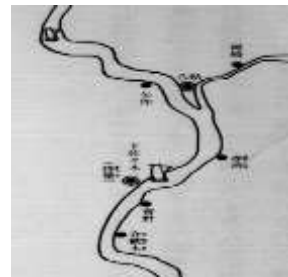
分派堰断面略図・原理

矢作川の水運 ①

- 岡崎城主が田中吉政のころ、堤防も整備され河口の港と矢作川上流や中流の地点の間を帆船によって往来した
 - 河口の港からの主な荷物・・塩、魚、綿・綿布、陶器等
 - 河口の港への主な荷物・・・ 木材、薪、石、天然氷、柿等
- 六ッ美地区には、合歡木、上青野、赤渋等の土場や渡し場があり、上下する帆船が立ち寄った
- この水運は、東海道本線開通後の大正6年頃まで続いた
(トラック便の利用、上流に用水やダムができたこと等で水上交通は姿を消した)



帆船



土場

矢作川の水運 ②

- 矢作川は西三河地方と信州を結ぶ重要な運輸交通路であった。
- 川船の最盛期は、1860(慶応)年代で、下流の中畑（西尾市）には100艘を超す川船が川面を往来していた。
- 川船による水運が発達したのは1670年(寛文年間)ごろ
- 矢作川は流れがゆるく、川底も浅いため重い荷物を乗せた川船の運行には適していなかった。そのため、船幅が広く、船底は浅い構造になっていた。



百々貯木場跡地